

コミュニティでの展開に尽力された鈴木みどり先生

岡井, 寿美代

(出版者 / Publisher)

法政大学図書館司書課程

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Journal of Media and Information Literacy / メディア情報リテラシー研究

(巻 / Volume)

3

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

26

(終了ページ / End Page)

31

(発行年 / Year)

2021-11

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025517>

法政大学図書館司書課程

メディア情報リテラシー研究 第3巻1号、026-031

特集 「鈴木みどりとメディア・リテラシー研究：今日的意義、そしてこれから」
——思い出——

コミュニティでの展開に尽力された鈴木みどり先生

岡井寿美代

NPO法人FCTメディア・リテラシー研究所

1. 鈴木みどり先生との出会い

今から約30年前の1992年。部落解放・人権研究所女性部会の一泊研修会が大阪・箕面市の山荘で開かれた。鈴木みどり先生は、メディア・リテラシーの講師として招聘されていた。

私は、この時期大きな課題を背負って仕事をしていた。社会教育施設で働き、小学生や中学生と活動を共にし、仲間づくりに重きをおいて、トラブルが発生すれば話し合いを繰り返し、解決に導いてきたと思っていた。しかし、子どもたちの一部は人権意識が育っていないばかりか、人権侵害行為を起こしていた。その結果、担当者として、これまでの指導方針や活動内容が間違っていると保護者や教育関係者から非難された。すべてを投げ出し、消えてしまいたい衝動にも駆られていたが、その気持ちを冷静にさせてくれたのも子どもたちだった。20歳代のほとんどの時間は、それまで信じてきた方法だけで、子どもたちとガムシャラに生活することに費やしてきた。何をどのように変革していく必要があるのかを同僚とも考え始め、議論を深めた。子ども間での暴力やコミュニケーションが上手くいかないときに、関わるおとな自身も多様な選択肢を提案し、子ども自らの意思を尊重して結論づけることをしてこなかったことに気づいた。まずは、自分が、おとなたちが変わるための挑戦が始まった。

1989年1月7日に昭和天皇が亡くなり、国民は喪に服すこととなった。街中が静まりかえり、居酒屋等開店していればバッシングを受けた。テレビ番組は皇室特集しか放送されなくなり、レンタルビデオ店は、大繁盛だった。1990年になると、イラクのクウェート侵攻に端を発して、国連安全保障理事会は撤退しなければ武力行使を認めるとし、1991年1月にアメリカ軍率いる多国籍軍はアラビアンナイトの美しい国を空爆した。湾岸戦争である。闇夜に浮かぶ多くの戦闘機の光と爆音と炎と煙がテレビニュースで映し出された。多くの民間人の命に想いを馳せながら、実際の戦争がまるでテレビゲームの画面のようだと多くの人が感じた。1992年4月には、米国ロサンゼルス中心に抗議行動が勃発した。黒人男性が警察官から暴行を受けたが、警察官が裁判で無罪となったことへの怒りの爆発だった。

自分の進むべき道の迷いと激しい社会情勢の中で、鈴木みどり先生と初めて出会い、メディア・リテラシーにふれたことは、これ以降の社会の捉え方や関係、生きる方向を決めていく一筋

の光となった。

2. メディア・リテラシーを学ぶこと

研修には、地元中学校の教職員と一緒に参加した。それまでの経験として、会議に参加して発言することや参加型の学習も何度か受けたことはあった。それでも、参加者の先頭を切って発言できてきたかと問われると、むしろ他者の意見を聞いてからものを言い、感情的に、直観的に発言することが多かった。

鈴木先生は、「空気を吸うがごとく、シャワーを浴びるかのように存在しているメディアは、文字や映像（人物、風景、物、色、光、音等）で構成されたものが、テレビや新聞、雑誌やラジオ等で映し出されるが、それは現実そのものではない。世界の出来事に重要性の順番をつけて提示し、カッコつきの『現実』を作っている。」とお話された。一度聞いただけでは、理解できなかったものの、すぐに「重要性の順番って誰が決めているのか。」と疑問がわいた。続けて「メディアが送りだしたメッセージをそのまま受けとるのではなく、市民、すなわち読み手がそのメディアを解釈し、意味をつくりだすのである。」とメディア・リテラシーを学ぶ基本を語られた。まずは、「私のメディア史」のシートに自分の人生で、どのメディアとどのように付き合いしてきたかを記入する。全く考えたことのなかった関係性を、改めて視覚化することにある意味感動した。白黒テレビが家に来たときのことやどんな番組を見ていたか。また、マンガの単行本を何冊もお小遣いで購入するために、冬休みの全てを使って家事手伝いや親戚のお店の労働をしたかを沸々と思い出したのである。グループで「私たちのメディア史」を作り、年齢も生い立ちも違う参加者が対等な立場で話し合っていく。その次は、テレビコマーシャルを使っての作業だった。1本のCMは何秒か。一時間番組で何本のCMがあったか。どんな業種が多いかと数量を調べていく。そして、そのCM一本の登場人物やカメラアングル、色調、テロップやBGMなどを分解していく。ビデオテープを再生しては巻き戻し、一時停止をしては、書きとるという作業は、とても根気のいることだったが、鈴木先生やFCTメディア・リテラシー研究所（以下FCT）のみなさんは科学的な分析を重ねていたことも知った。

特に、女性が全面に出てくるCMでは、かわいらしさや美しさを強調した服装や化粧品に意味を持たそうとしていることに違和感を持った。鈴木先生は、「女性の体の一部を使う、性差別に満ちた女性像」と映像分析された。女性差別に無関心でいたわけではなかったが、雰囲気や感想ではなく、構成されたメディアのメッセージをクリティカルに読み解くとは、こういうことなのかとおぼろげながらに感じたのだ。「クリティカルは日本語で批判的と訳されるが、むしろクリティカルはクリエイティブだ。」も響いた。

このように、30年前の研修を記憶の中で留めて記せるのは、紛れもなく鈴木みどり先生との出会いが、メディア・リテラシーの学びを子どもやおとなに届けたいと心に刻んだからである。

3. 1995年 阪神淡路大震災

1994年から、鈴木先生は立命館大学でメディア・リテラシー論を教えられるようになったことも功を奏し、FCTの理事だけではなく、鈴木ゼミの大学院生のご協力もあって、関西においてもメディア・リテラシー講座が単発で開催されるようになった。年間数回の講座に参加するも、当初からの目標であった、子どもやおとなに学びを提案していきたいということを実現するには、まだまだ、準備も学びも深めていなかった。

1995年1月17日、阪神淡路大震災が起こった。大阪北部に住む私たちの街でも、電灯が消え、電話は通じない。職場に行くと、電車が動いていないため、数人の職員で建物の破損や不具合を点検する。情報収集のためのテレビからは、神戸の街が映し出された。その日の夕方からは、地震の被害を受けた知人からのSOSや亡くなったとの痛ましい連絡もあった。数日後には、支援物資やカンパを集め、被災地に届ける活動を始めた。メディアについても、公共の電波を利用できるのは、ライフラインとしての役割を担っているのではないのか。もっと人命を助け、支援が受けられる情報を発信して欲しいとの苛立ちと憤りを禁じえなかった。

FCTは、発生時や一年後などの報道を分析していた。関西や関東など地域によって、何をメッセージとしているのかの違いを知る事となった。

その後も相変わらず、機会があれば研修や講座に参加していた。1999年に箕面市立中央生涯学習センター主催の「みのお講座」が開始された。鈴木研究室が企画・運営を担った講座だった。社会教育施設での講座の実現だったため、講座も参加させていただいたり、企画会議にも同席させていただける機会を得たりした。鈴木研究室にも厚かましくお尋ねした。FCTの研修に参加しているときに2000年5月にカナダ・トロントでメディア・リテラシーの国際会議が開催されること知った。鈴木研究室のゼミ生でもなければ、FCTの理事でもない私が参加できるわけがなかった。それでも、参加者を決定する経過の中で、西村寿子（現FCT所長）さんから、コミュニティでの講座実施を期待できるとの理由で、鈴木先生に強くアプローチしていただいた。そのおかげで、参加できることになった。

4. サミット2000 子ども・若い人たちとメディア～ミレニアムを超えて

実は、カナダ・トロントは、二回目の訪問だった。1988年に新婚旅行でナイアガラの滝やCNタワー、マーケットなどの観光地を訪れたことはあった。

今回は、アカデミックな国際会議で、カナダやイギリスなどから先進事例が発表される。会議場に入っても緊張がほどけることはなかった。全体会のレセプションが始まった。広い会場の照明が消え、大きなスクリーンにプロペラ音。空撮されたトロント、クイーンズストリートにあるCitytvの建物が映し出される。テレビ局と言ってもスタジオはなく、廊下でのレポート姿や、入り口ホールでのコンサート風景などが紹介されていった。最後に局の創設者であるモーリス・ズ

ナイマーの登場だった。これら一連の説明を鈴木先生は丁寧にしてくれた。そして、Citytv への現地見学も準備してくれたのだった。

鈴木先生は、日本代表として招かれ、国際協力委員として、2回の報告を行われた。そんなお忙しい中でも、サミットを運営していた AML (メディア・リテラシー協会) メンバーのご自宅でホームステイをさせていただき調整も行っていった。私と西村寿子さんは、元小学校教師であるディディ・シンクレアさん宅でお世話になった。

国際会議は、メディア・リテラシー教育をどのように進めているかが、メインテーマだったため、レン・マスターマン教授やデイビット・バッキンガム教授らも報告された。鈴木先生は、「マスターマンが自分の国から出るのは、これが最後だと言っていた。」とお話され、サミット 2000 がいかに重要な国際会議であるかを意義づけられた。

会議以外の場面では、ゲストを迎え入れて運営する AML メンバーに対しての労いと気遣いを表し、共に日本から参加しているメンバーとのネットワークを繋ぐためにと、若者が集うまちのアジア料理のお店で交流会を設けてくれた。さらには、私たちがお世話になっていたディディさん宅でのホームパーティも提案された。私たちは、ディディさんと部屋の片づけやしつらえ、食材の買出しや料理などの準備をして、鈴木先生やゼミ生、ゼミ生のホームステイ先の方々をお出迎えするといった貴重な体験もした。そんな繋がりが花ひらき、FCT が 2002 年 5 月にディディさんを日本にお招きした。再会のチャンスをとらえて、私が働く青少年施設と地元中学校での授業をしていただいた。

5. 2001年 連続講座の実現

国際会議参加とメディア・リテラシーの先進事例を目の当たりにして、なんとしても本腰を入れて学ばなくてはならないと、堅い決意をし、立命館大学でのメディア・リテラシー論を聴講させていただけることとなった。2000 年後期授業からは、大学への申請手続きで聴講生となり、夜の部にも通い始めた。学ぶ学生側も、夜間は働いている人が多く、授業で取り上げる内容も違っていた。

授業が終わった後も、遅い晩御飯をご一緒させていただき、ひたすら鈴木先生のお話を聞いていた。自分自身が学べば学ぶほど、楽しくて仕方なかった。仕事の現場は、枠組そのものが変わった初年度であった。最初に鈴木先生に会った頃の、どこか別の場所へ逃げて行きたいのではなく、むしろ、職場での変革をもっと大胆に進めていきたいと考えるようになっていた。そのためには、講座ができる予算や参加者の多様性も追求したかった。

職場内での合意やメディア・リテラシーの必要性を理解してもらいながら、教育関係機関との連携も怠らなかった。2001 年度の予算を組む時期から、ジャブを打ち続け、どうにか見通しが立つ頃に、鈴木先生へ依頼した。そして、立命館大学メディア・リテラシー研究プロジェクトとして効力していただけることが決定した。

プロジェクトの多大なご尽力により、2001 年 7 月から 10 月まで 6 回の連続講座を開催する

ことができた。「Study Guide メディア・リテラシー入門編」(リベルタ出版、2000年)をベースにした組み立てだった。子どもたちが公教育の場で学べるために、まずはおとなに参加してもらおうという講座だった。教師や保育士、保護者や大学生などが集まった。立場の垣根を超えた学びができた。次年度からも年に3回の講座を実施した。引き続き協力を得ながら、講座に参加していたコアグループで映像分析をし、2004年には、中学校教師が総合学習の授業でメディア・リテラシーを取り組んだ。

しかし、個人の努力のみではなく、学校や研究者、関係機関のまとまりで推進力を強めるということから、2006年5月に「高槻メディア・リテラシープロジェクト」を立ち上げた。目的は、中学校で授業を展開することだった。発足時に鈴木先生は、「中学生がメディアを批判的に分析する能力にとどまらず、創造的にコミュニケーションをつくりだすようになることである。」と強調された。

2006年度は、当該中学校生徒へのメディア環境調査の実施・分析と1年生へのプレ授業。2007年度は、2年生の選択授業(教科総合・技術科)において、週1回1時間の前期15回・後期15回の授業を行った。2008年度は、2年生の授業に加え、3年生でも授業を行った。FCTからは、西村寿子さん、森本洋介さんが教師とタッグを組み、授業内容の計画、教材準備、ファシリテーターとしてエネルギーを注いでくれた。鈴木先生が示唆された、中学生が映像作品を創り、発表し、対話することも授業展開に含まれていた。中学校の教育課程に取り入れられたこの実践は今もかなり画期的だったと確信している。

6. 今こそ、公教育の場にメディア・リテラシーを！

2006年7月23日。鈴木みどり先生は、65歳で逝かれた。あまりにも早すぎる。東京の教会でのお別れは、悲しさ、寂しさを通り越しての怒りがゴチャゴチャだった。

中学校での実践は、見ていただけなかったが、2009年度まで高槻メディア・リテラシープロジェクトは延長した。私は、2010年5月末をもって職場を退職した。新たな夢を持って、市議会議員にチャレンジするためだった。2011年5月から市議会議員となり、今年10年目となった。

現在、世の中は情報通信で混乱している。誰もが、携帯電話を持ちSNSでコミュニティが創られ、AIの機械化が進み、ICT教育と称して小中学生にタブレットを利用させることに躍起になっている。

「ちょっと待って、それって元々どういうこと？誰が何を決めているの？それは、自分とどう関係するの？」毎日、気持ちがざわつく。

今こそ、公共の場や公教育にメディア・リテラシーを取り戻す必要がある。鈴木先生はもういないけれど、日本にメディア・リテラシーを確立してくれた。そして、しなやかに活動を続けているFCTのみなさんや研究を深め広げてきた研究者のみなさんがいるし、若手研究者を育て続けておられる。

さらに、私のそばには、鈴木先生と出会わせてくれて、FCTの活動や大学での聴講、講座や授業の企画・運営等々、全ての活動に、西村寿子さんがいる。苦しがる私を、引っ張り、後押しし、伴走してくれている。感謝してもしきれない。

これだけの強みがあるのだ。何も恐れることはない。私も、学び直し、行動する必要がある。さあ、ゆっくりとまた、歩きだそう。

「同時に色々考えて、スピーディーにやらなきゃだめよ！時間がないのだから。」と言わずに、見守ってください。宜しくお願いします。鈴木みどり先生。